

## 随想

## 横井小楠のこと

## 現代より遅れていたとは言いい切れぬ「封建時代」

(株) P P Q C 研究所 加藤 宏光

横井小楠の掛け軸がテレビ東京の人気番組《なんでも鑑定団》に出品された(平成二十六年六月一日)。

横井小楠は熊本藩士の次男で、のちに江戸へ留学して川路聖謨や藤田東湖等と交流。帰国後私塾小楠堂を開いた。江戸の無血開城で有名な勝海舟は、「おれはこれまでに恐ろしいものを二人見た。その一人は熊本の横井小楠であり、一人は薩摩の西郷隆盛である」と述懐している。

横井小楠はそれほど知られていないが、坂本龍馬等の明治維新を進めた思想家に大きな影響を与えたとされている。

その横井小楠は開国の必要性を主張したため、熊本藩は危険

な思想家であるとして、高圧的な姿勢を取り、活躍の場を与えなかつたが、その塾で学んだ福井藩士・三井三作が彼の思想が含む重要性を評価して、藩主松平春嶽に奨めたことから福井藩に迎えられて、経済政策に関与した。積極的な絹糸の輸出で莫大な利益を上げたという。

その思想は松平春嶽が幕府の指導者として重用されるに従って、幕政へも取り入れようとして熊本藩へ申し入れられた。しかし、熊本藩の保守的勢力に阻まれて、幕府の政策に取り入れられるには及ばなかつた。

視点を変えて見てみよう。幕末にはそれぞれの藩の財政は苦しく、また家の存続こそが最大の命題であった武家制度を考え

ると、なぜ藩士の次男であつた小楠が江戸で学ぶことができたのであろうか? 横井小楠は熊本藩家老の長岡是容(これたか)の後ろ盾があつたというから、時習館(注参照)時代からその能力を高く評価されていたのであろう。

また、進歩的な思想を啓蒙する塾(小楠堂という)を熊本藩で開塾したが、保守的な藩の首脳部に圧迫されていたとしても、潰されることなく塾を続けることができたからこそ、福井藩士がそこで学ぶ機会を得たのである。封建的であつた江戸時代に藩の首脳に睨まれながら、時代の先を見越した先進的な意見を塾生に講義できたことは、われわれ現代の人間が型にはま

つて想像しているより、ずっと自由度があつたからではないのだらうか?

もし、封建制度が現代の人間が想像するように硬直的であつたとしたら、藩士の次男である小楠が江戸で学問を修めることは難しかったであらうし、修めた学問を基に革新的な教育塾を開いた場合、容易に閉鎖に追い込むことも考えられる。

閉鎖された塾では他藩の人間が学ぶことはできない。松下村塾で知られる吉田松陰もしかり。国法を侵して海外へ蜜出国を試みて囚われの身となつたのちにも塾生を育て、明治維新の精神的支えとなつたことはよく知られている。昨年の大河ドラマで知名度が上がつた《山本覚

馬》も、会津藩士の身分であった時期はともかく、獄中で書き起こした政治改革論が明治政府に取り入れられたことで、京都を中心として革新的な政治と教育を推し進めることができた、と紹介されていた。

獄中で、目の見えない覚馬が膨大な建白書を口述できたというのは、その時代にも現代では思いつかないほどの思想の自由度があつた証左であろう。

先に挙げた勝海舟の家系についても同様なことがあつた。維新の折に江戸城を無血開城させたことでよく知られる、勝海舟の曾祖父は農民であつた。盲目であつた祖父の代に座頭の特権として認められていた高利貸で財を成した彼は息子のために御家人株を買つた。当時は貧乏な旗本が五〇〇両ほど（現在の貨幣価値で五、〇〇〇万円ほどになるだろうか）で旗本の家系を売り出すことが少なくなかつた。海舟が旗本であつた勝家の養子に入つて、旗本《勝義邦・通称麟太郎》が生まれたのであ

る。

その後の勝海舟は長崎で海軍伝習、海感臨丸を指揮してアメリカを訪れ、帰国後海軍操練所を開設。軍艦奉行となり、江戸城無血開城の立役者となつた。

維新後は参議・海軍卿・枢密顧問官を務めた。伯爵に叙された当初、子爵を叙すると伝えられた折に、

『四尺（約一二〇センチ）とは、背丈にも届かぬもの』

といつて爵位を辞退して、伯爵を得たという逸話が残っている。

三代前までは無名の農民であつた彼が、国の方向を決めるため、時の將軍と相対で話す立場になつたことも、また無血開城を話し合つた相手の西郷隆盛が下級武士であつたことも、日本の精神構造が柔軟であつたことを示唆する事実であろう。

最近の日本では、東大等名門国立大学へ進学するのは、経済的に裕福な家庭の子女であるような。幼稚園から始まる進学への激しい競争に勝ち残るためには、幼い頃から進学塾で厳しい

競争に勝ち抜かねばならないというである。名門大学への進学には相当の私塾で勉強することが必要となり、これらの教育費を賄えるだけの収入が必要となる。その結果、旧帝大等へ進学できるのは裕福な家庭環境にある子供……となる次第である。

このような激しい進学競争を勝ち抜いたとしても、入試に適應した特殊技術に秀でるだけで、社会に出てからの優秀性が保証されているわけではない。実社会ではマークシート式の知識は無用であるし、時には邪魔にさえなり得る。

著者の小学校時代にも校庭に当たり前のように銅像があつた二宮金次郎（尊徳）のように、極貧環境でも自力で学び、その知識を社会に活かせるヒトや、そうしたヒトを受け入れる社会は、封建時代と一くくりにはされがちなが、現代より遅れている（劣っている）といえるものではあるまい。

注：横井小楠（よこいししょう

なん）は一八〇九年九月に熊本藩士の次男として生まれ、儒学者として知られる。維新十傑の一人に数えられる。

熊本藩で、藩校《時習館》で学び塾頭となつた。藩政改革を試みるが、反対派の攻撃で失敗。後に松平春嶽に招かれ福井藩の政治顧問となつた。熊本藩で私塾（小楠堂）を開設し、思想を説いた。また、自宅（沼山津の四時軒）へ明治政府の立役者である坂本龍馬や井上毅等が訪ねて、さまざまな影響を受けた。

説としては、幕政改革や公武合體論を提唱した。すなわち、鎖国体制や幕藩体制に変えて新しい国家と社会の構想を公共と交易の立場から構築、身分階級の垣根を超えた討論で政治を運営し、また外国との通商貿易を進めて産業を振興することにより経済発展をさせようとした。

明治政府でも参与として出仕したが、一八六九年（明治二年）、十津川藩士によつて暗殺された。